

## 社会地誌について

——トルコに例をとりながら——

### 一 一枚の分布図（まえがきに代えて）

（本文中の「1」内の数字は文末に記載した  
文献一覧表の番号を表わす数字である。）

#### (15) 社会地誌について

ここにトルコ(1)の県別の文盲率の分布図がある。すぐに読みとれることはごく単純なことで、分布の傾向が北々西方に低く南々東方に高いということである。なぜこのような分布の傾向がみられるのかということがすぐに問題になる。すると私たち地理学に携わる者は、ややともすればトルコにおける地形起伏の分布図や、鉄道・道路の分布図、さらには、商品化率の高い小麦と自給率の高い大麦との作付面積比の分布図(2)などを持ち出してきて、この分布図と較べてみながら、分布の相関が高くなりそ

うな図をみつけ出し、トルコの県別文盲率の空間的な分布の様相を規定する要因をつかみだす手懸りにしようとする。

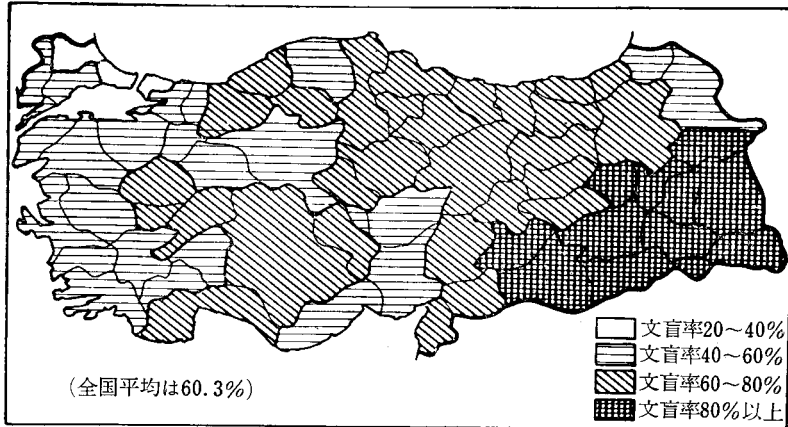
だが、いきなりこのような行動にとりかかる前に考えておかなければならないことがある。その一つは統計上の問題であり、他の一つは地理学の問題である。

前者は統計上の問題としてあらわれているけれども深刻な社会問題の反映であり、また後者の問題とも密接に関連してくる。

ここにいう文盲とは何か。その統計上の定義が現実を不当に歪めてはいないか。さて、このばあいの文盲とは、何かある言語を読み書きできない者だけでなく、読

鴨 澤 巖

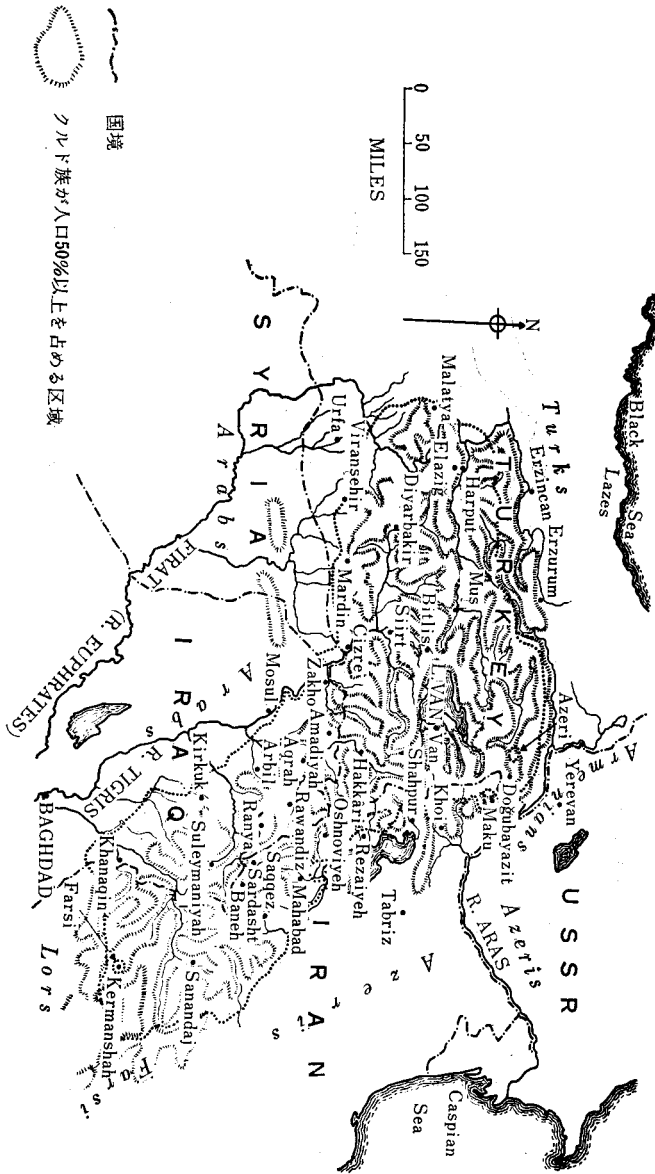
第1図 トルコの県別文盲率分布 (6歳以上の人口につき) (1960年)



注: 23 Ekim 1960, Genel Nüfus Sayımı, Türkiye Nüfusu, Yayın No. 452. Kısım-8. 31 より作成.

めはするが書けはしない者も含み、とくにトルコ語については、アラビア文字による旧正字法では書けても一八二八年以後のラテン字母による新正字法では書けない者を文盲としている。(「」はしがきの説明による。)したがってもし、なんらかの理由でトルコ語の新正字法の使用に抵抗し旧正字法を守りつづける者が多く住む地方があるとなれば、さらにそこが少数民族の住む地方で、彼等独自の民族語の使用は制約されている(つまり民族語での識字率は低水準にある)そのような地方があるとするならば、そこでは通常の文盲の概念、読み書きができない者という概念では律することのできない別の規準のもとに、高められた「文盲率」が示されることになる。第2図から読み取れるように、文盲率分布図で八〇%以上を示す地方は、クルド族が住む地方なのである。クルド族は一九二五年にトルコ政府にたいして大規模な反乱を行った。その主要因の一つはトルコの共和政化、政教分離化に反対することにあつたとみなされている(101 p. 38)。かれらは部族的な生活をしていて、部族の首長はしばしば宗教(トルコ族と同じスンニ派イスラーム)上の指導者でもあつた。Kalifateの擁護を目的とするこの





第3図 クルド族の分布

注: The Kurds, An Historical and Political Study より借用.

反乱がかえってケマル・パシャの急進的な近代化政策を促進させる結果をもたらすことになったが、その近代化政策の一環として登場したトルコ語のラテン字化にクルドは背を向け、今日でもイラクやイランやシリアの同族同様アラビア文字を使用している〔10〕p. 36〕。彼等自身の言語クルド語の使用は非公式のばあいでもさへも妨げられている〔10〕p. 45〕。彼等は自からクルド人を名乗ることさえ許され<sup>3)</sup>ないほど圧迫され、民族文化の発達も極度に抑圧されているのであるから〔10〕ibid.〕、通常の文盲率概念にしたがっても文盲率が高くあらわれるには相違あるまいが、この文盲率分布図には文盲率概念の合理的とはいえない難い拡張にもとづいた、特殊な地方にたいする特殊な誇張が含まれていることは見落せない。

つぎに、地理学的に問題になるのは、トルコ共和国という範囲内で文盲率の分布とそれを規定する要因について論じることとどれだけの意味がこめられているかということである。いまたとえば、トルコ共和国の教育行政当局の立場に立てば、トルコ共和国の領域範囲内での文盲率の分布の態様を知ることには一定の意味があるに相違ない。しかし私たちは当局ではないのだから、このよ

うな妥当性がそのまま私たちにとつての妥当性になるとは限らない。第3図にみるように、この国の南東部には多くのクルド族が存在しているが、さらにクルド族はイランやイラクの隣接地域にも広く居住している<sup>4)</sup>。したがって、少なくともクルド族の立場からはトルコ共和国の範囲に限って地域を設定する必然性は、さしあたり必ずしも強くないとしてよいし、トルコ領の範囲での地域設定だけが必然的であるといえないことは明らかである。

したがって、あれやこれやの吟味を経ないで、いきなりトルコ共和国の領域を一つの地域として提示し、その「地域」内部での文盲率の分布やそれを規定する要因についての検討を開始することは、手続き上欠けるところが多いといわなければならない。

しかし、先に「トルコ共和国の教育行政当局の立場」からはトルコの範囲でここに取り扱う主題を論じることには意味があるだろうとしたことから、そこにただちに意味される以上の深い意味が発生してくる。上述のようにクルド族の立場<sup>5)</sup>からは、トルコ共和国を範囲として地域を設定することの妥当性に留保がおかれるにかかわ

らず、いやむしろそれだからこそ、トルコ共和国の範囲で地域を設定することには大きな意味が生じてくる。トルコ共和国の多数民族であるトルコ族と少数民族であるクルド族との間には長年にわたる抗争関係<sup>(6)</sup>があつて、トルコ共和国はまさに両族の抗争の場となつてゐる。トルコ共和国はクルド族にたいする支配の装置となつてゐるのである。そのような対抗関係<sup>(7)</sup>が、トルコ共和国をこの局面において地域として設定することを可能にし、必然にもしてゐるのである。

トルコの東部地方は、遊牧が一般的に行なわれている点でも、またわずかな耕地で行なわれている農業についてみてもそれが大地主の「領地」の一片とともに農民が売り買いされるといった状況下にある点でも<sup>(3)</sup> *cf.* 337 参照)、トルコ共和国のなかで経済的に特徴のある地帯となつてゐる。また社会的にみても、既述のような意味を含みながら文盲率が高いことや、半穴居に近い土小屋に住む状態がみられること<sup>(3)</sup> *cf.* 337) が特徴となつてゐる。このような経済的、社会的特徴は、上述の対抗関係に照応した特徴なのであつて、これらの特徴が、トルコ一般との関係において成り立つ特徴であること

は、形式論理的にはもちろんのこと、内容的にも重い意味をもつて成り立つことなのである。

以上のことを一般化すれば、社会をかたちづくる諸関係の空間的局面が地域(社会地域)として現れるに他ならぬということになる。

(1) vilayet.

(2) [8] 72 ページ、第 8 図 a, b 参照。

(3) したがってトルコ政府によれば、トルコにはクルド問題は存在しない ([10] p. 159)。もっともその代りに「山岳トルコ族」問題が存在することになるのであろうが。

(4) トルコ、イラン、イラクに住むクルドが部族的な関心を超えて、民族の独立を志向する先駆は、第一次大戦中の在外クルド知識人の行動様式のうちにみられる ([10] pp. 30~32)。

(5) 「クルド族の立場」というものを現在設定してよい妥当性については [10] pp. 33~46 を参照のこと。

(6) 辺境の厳格な管理を意図した Mahmud II 世の治政、トルコとの対抗関係のなかでクルドを味方に引き入れようとしたロシアの外交政策、一八三二年のエジプト軍によるオスマン・トルコ軍の敗北などの諸要因の連鎖のなかで、一八三〇年代にはトルコにたいするクルドの最初の反乱が起つた ([10] pp. 22, 23)。その後も反乱はつづき、トルコの支配は従前同様名目的なものとどまつた。しかし共和制成立以後、クルドにたいする同化の圧力は強められ

た。第二次大戦前の広汎な「文明化への参加」の勸奨は、クルド住民の多くの生命を奪い、多くの村落を破壊する結果をもたらした〔3〕 Crp. 332, 333)。現在は政治指導者層を含むクルド住民の遠隔地への強制移住にもとづくクルド社会の破壊が進められている〔10〕 p. 46)。

なお、トルコ共和国との対抗関係が、クルド族内部の対抗関係をそのまま止揚するものではないことは付言するまでもない。

(7) ここにいう対抗関係には、反乱のようないわば動的な抗争の関係にとどまらず、経済的、社会的、文化的な一切の対抗関係を含んでいる。

(8) この対抗関係をぬきにしては、たとえば「地域開発」の特徴も見出せない。クルド居住地方における一九三〇年代以降の鉄道、道路の急速な開発は、一方では対ソ戦略の要請にもとづくものであるが、他方ではクルド族の反乱を鎮圧するためのものである〔3〕 Crp. 342,〔10〕 p. 44)。この地方に定期的な便を欠いた飛行場が「防衛拠点」〔3〕 Crp. 343)である重要都市の近郊に急速に建設されていること〔3〕 Crp. 345, 396)についても同様。

(9) 特殊は一般との関係においてのみ特殊であることができな

## 二 地域記載をめぐる若干の問題の検討

地誌とは地域についての叙述 Beschreibung である。

地域とは何かについての動かしがたい規定も展開せず、いきなりこのように記すことは、地域についての果てしない議論を展開してきた地理学者<sup>(1)</sup>にとっては、ずいぶん乱暴な議論の進め方と映るかもしれないが、ここでは「それに即して地誌記載が遂行される地表空間」を地域として定義することにする。もちろんこのような定義は「地誌とは地域についての叙述である」という命題と組み合わせるときに果てしない循環を展開するにすぎない無内容な定義である。しかし、地理学が地誌として地域を扱うときの実際の内容に即して自由に地域を扱うためには、かえって内容に乏しい定義の方が便利であるし、またそのような検討を進めていくなかで「地域」に徐々に具体的な内容を与えていくことができるであろう。

地誌記載の立脚点となる地域は、なんらかの意味でまとまりがあるとされる空間である。

たとえばルートシュヴェイト Ruzynych, E. Ф. はトルコの経済地誌〔3〕を記すにあたって、トルコ共和国を八個の経済地域、すなわちイズミル地方、イスタンブール地方、黒海地方、アダナ地方、中央アナトリア地方、デ

イヤルバクル地方、ハタイ地方、シヴァス・エルズルム地方の八地方に分けたが、それぞれの地方は「社会経済的发展水準と国土の各部における生産力の配置」(3) (p. 199)の点でまとまりがあるとされている。どのようなまとまりであれ、それは相対的なまとまりでしかないけれども、そのようなまとまりは、たとえば上述のルートシュヴェイトのばあいなら「社会経済的发展水準と国土の各部における生産力の配置」を指標 criteria として見出だされるまとまりである。

したがって、上述の「地誌記載の立脚点となる地域は、なんらかの意味でまとまりがあるとされる空間」とは、言葉を換えていえば、「地誌記載の立脚点となる地域は、なんらかの指標に即してまとまりがあるとされる空間」であるといえよう。ルートシュヴェイトが用いた指標が、さらに種々の要素に分解できるように、多くの指標は複合的な指標、あるいは指標複合である。

したがって、地誌の方法を検討するためには地域設定の方法について検討しなければならず(なぜならば設定された地域に立脚して地誌が記載されるのであるから)、地域設定の方法について検討するためには指標複合の性格につ

いて検討しなければならない(なぜならば、どのような地域が設定されるかは指標複合の性格しだいであるから)ということになる。

ルートシュヴェイトは、トルコの官庁統計やトルコの経済地理学的文献では、行政区分や行政上の計画に即した境界が採用され、農業の技術的専門化だけを意図する地域区分が行なわれていると指摘している。かれによれば、生産関係の型の相違は考慮されておらず、自然的同質性の原理によって区分することに帰着しているという(2)(3) (p. 197)。

二 a 自然条件は地域設定の拠り所となるであろうか。

指標複合として従来とりわけ好んで採用されてきたのは、いわゆる自然条件である。ここに、いわゆる自然条件と呼ぶ意味は、従来、自然と自然条件の違いが明瞭に意識されずにいて、自然条件と称しながらじつは自然について記述している状況を際立たせようとするところにある。たとえばルートシュヴェイトが「自然条件」(природные условия)として地質や起伏を記述する(3) (p. 19)以下参照)ときに、「自然条件」という呼称が、何にと



っての条件ということで使用されているかは漠然と推しはかるの他はない。おそらくはトルコ社会あるいはその地域的局面向っての自然条件ということなのである。それにしても、トルコ社会あるいはその地域的局面向ってのもそれはそれ自体として変動もし、また多くの局面を有するので、ともあれ「トルコ社会、あるいはその地域的局面向っての自然的諸条件を理解するための自然的基礎」とでも註記することが必要であろう。

トルコでは一九三三年以降《statisme》(Kevletçilik)と呼ばれる国家資本主義的政策が展開され、民族工業を發展させ産業ブルジョアジーの地歩を確立するための物的基礎を強化するために、農民から徴収された税を元手に、国家資金が国营企業の創設と経営のために投入されてきた。工芸作物もエネルギー資源もそのために動員された。一九四七年、とくに一九五〇年以降、エタチスム政策は、アメリカ帝国主義を先頭とする帝国主義と、その地歩が戦時中に強化されたトルコの大ブルジョアジーとの連合勢力を前にして「後退」し大幅に「解体」された(露骨なまでにかれらの道具として奉仕することになった)(以上の記述については〔6〕参照)。このような変化につ

れて、たとえば従来はカラサバンと呼ばれる何千年伝来のすきで耕されていた零細農の自給用穀物栽培のための耕地が、トラクターで耕される商品用穀物ないしは工芸作物栽培のための耕地に変わっていった。<sup>(5)</sup>このような社会的変化が自然条件の変化を惹き起す。これを穀物栽培についてみれば、内部アナトリアではトラクター化によって初めて秋の最初の雨および年初の最初の雨が播種にとって好都合なものとなった。従来は、ちょうどこの時期に晩春が夏の草枯れによる饑餓、冬の寒さによる饑餓から立直れずにいるために、わずかな面積だけが耕起されるにとどまっていた。同じくまた収穫期には乾燥気候のために穀粒がすぐに稔りすぎてしまつて穂から落ちるおそれがあったのであるが、動力化によって収穫作業が速やかに遂行されるようになると、収穫期の乾燥はそれほど害をもたらずものではなくなった。播種期および収穫期にみられる、このトラクター化に伴う変化は、半乾燥地での耕作の集約化をもたらした(〔6〕の5参照)。

さて、一九五〇年代前半の内部アナトリアの穀物栽培における動力化をめぐるこの例は、自然条件、つまりならぬ社会的行為(このばあいは穀物の播種や収穫という

労働過程<sup>(6)</sup>を遂行するさいに自然がはたす条件的な役割は、その社会的行為が時間とともに変化することによって変化するを示しているが、さらにこの例はそれだけではなく、異った労働過程を遂行する異った階層ごとに、つまりトラクターを用いる階層と伝統的なカラサバンに依存する階層<sup>(7)</sup>とは、自然条件が、すなわち播種期の雨の恩恵の度合いや収穫期の乾燥の害悪の度合いが、ないしはそもそも雨や乾燥がそれぞれ恩恵ないしは害悪であるかどうかについても、異なることを示している。

このように考察してみると、トルコ社会一般ないしはその地域的局面一般を前提にして、いわばいきなり「トルコにおける自然条件」について語ることはほとんど不可能なことであり、さらに、局面をやや特殊化して「トルコ農業における自然条件」について語ることでさえもまだ同様にほとんど不可能なことであるといえるであろう。そのように語るときそこに提示される自然条件はあまりにも抽象の度合いが高く、自然による被制約性を打破する契機をもはや含まないところで語られる。

社会的変化につれて付随的に変化し、社会階層を異にするにつれて付随的に異なる自然条件、そのような自然条

件に依拠して社会的な面での地域を設定しようとする場合には、論理的な不合理が存在するとしかいいえない。

このように、自然条件に依拠して地域を設定することでさえ無理であるというのに、いったいどのようにして自然に依拠して社会的な面での地域を設定することが可能だというのであろうか。それは困難というよりは不可能なことである。なぜならば、自然が自然のままにとどまり、自然条件に転化しないかぎりには、自然と社会との間には何の関連もあり得ないからである。たとえば、トルコ国土の主要な気候である地中海性の気候やステップ性の気候を考察するばあいには(観測所の配置や機能について、すなわち社会がどのような方途を用いて気候現象を解明するかについて技術的に考察するのではなく、気候そのものの自然科学的性質に即して考察するかぎりには)、たとえばトルコの国境、県境、市町村境など行政的な境界は何の意味ももち得ないが、この事例は上述のことを明示している。社会との間に脈絡を有しないものに拠って社会を論じることができない。自然を、社会との関連において論じようとすれば、自然が自然条件に転化した局面で自然をとらえなければならず、自然条件として自然をとらえ

ようとすればそのとき自然は社会の変化につれて変化するもの<sup>(8)</sup>に転化してしまっているということになる。

そもそも資本主義経済が発展し、とりわけ資本主義世界経済が発展するにつれて、社会・経済現象が自然から規定されること Naturbedingtheit の局地性は減じてきた。狭い地表区域での「自然と社会との対応」は破られてきた。地理学は古典古代以前から、自然と社会との局地的対応現象に関心をもってきたが、この対応の破壊につれて自己の学問的特徴を失うことをおそれ、かえって頑なに殻に閉じ籠る傾向があったと思われる<sup>(9)</sup>。この傾向の存在を前提にすれば、以下で検討する景観学的傾向も、地域記載学的な傾向も、その発生の理由とともに無理なく理解できるであろう<sup>(10)</sup>。

二一b 景観は地域設定の拠り所となるであろうか。

ルイス Louis, H. はトルコ地誌の展開にさいして文化景観 Kulturlandschaft を軸にしてゐる<sup>(6)</sup>。もっとも文化景観とは何のことであり、またなぜそのようなものをもって来なければ地誌記載が遂行できないかについては一向に要領を得ないのだが、ともあれ景観を指標として地域を設定する方向が今日も存在する<sup>(11)</sup>。

景観の定義についての果てしない論議を集約してハーツホーン Hartsorne, R. は、結局のところ景観とは可視的な現象に限定されるものであると述べ、さらにそのような限定が付されたものに地理学の対象を局限する無意味さを論じている<sup>(13)</sup> V, VII<sup>(12)(13)</sup>章)。

景観の定義が可視性を条件としているならば、ヘットナーさえも指摘するように景観にあっては「事物の内的因果関係は破壊されて」<sup>(12)</sup> S. 129) しまうので、そのような景観は科学的に意味をもつ地域を設定するに足りる指標としての資格をもたない。またもし景観の定義を拡張して可視物限定性を放棄するならば、もはやそれは景観以上の何物かであり、依然として景観という名称に固執するならば徒らな混乱が持ち込まれるだけに終ろう。

初めのうちは可視物限定性を守っていたシュリューター Schlieter, O. やブリューヌ Brunes, J. のような景観論者が、後には政治地理学さえも「裏口から」ひき入れるその無定見さをヘットナーはなじっている<sup>(12)</sup> S. 128, 129 参照)が、景観論の特徴は本来的に内的無規定性にあり、可視性という形式的限定さえ具えていれば何物

をも自家葉籠中の物としてしまふのであるから、なじるに足るほどの無定見ではない。<sup>(14)</sup>

景觀が可視物限定性に立脚する以上、分析の手懸りとしてはいうまでもなく有効でありながらも、景觀に限定してトルコを研究してみても、景觀をエタチスムや物納小作制度をはじめとする不可視的諸現象との関係で位置づけることができない。そのような位置づけなしに景觀の一般化を試みることは無意味である。またそもそも一般化を試みないのであれば景觀の研究は学問的意味を有しない。

二一。chorology あるいは chorography と二元論。

自然条件も景觀も、地域を、少なくとも科学的に意味あるものとしての地域を設定するに足りる拠り所たり得ないということは、自然と人間との関係を何か地理学に特殊な神秘的なものとして扱うやり方、すなわち自然条件をさまざまな社会とその諸局面に照応した、社会発展の従属変数というそれにふさわしい位置を越えて引き揚げるやり方には根拠がないことを示している。

しかしながら、自然を自然科学的に扱い自然条件を(技術学に依拠しながら)社会科学的に扱うことでは満

足しない近代地理学は chorologische od. chorographische Wissenschaft としての地理学<sup>(15)</sup>の方向を探索した。

二一aで展開したように、自然は自然条件として社会と関係し、しかも後者の従属変数なのであるから、ヘットナーやハーツホーンが説くようにこの間の関係を前提することなしに chorologische od. chorographische Wissenschaft として地理学を規定し、註(15)の意味での二元論が克服されたものとしても無理である。社会科学的地域を理解する方法は、自然科学的に地域を理解する方法とは、この意味において異なるのである。両者をとものに地理学の名のもとに統合することには無理がある。

セミョーフスキー Gemecknif, E. H. は封建社会の自然的な多角経営のもとでは経営の特化、経営方法の基本的な差異、明確な形をとってあらわれた経済地域が存在せず、資本主義の発展、地域的分業の複雑な推移、経済地域の形成にもなって、経済地理学は地理学から分離したといっている(18)29, 30ページ)。

またシュミット・レンナー Schmidt-Renner, G. は、経済地域の本質的な形成者としての überregionale Funktionen というものを考えている。この機能を担うのは、他

地域との間に能動的な関係を取り結ぶ *gebietsbildende Faktoren* であり、それに対応する *gebietsbildende Bevölkerungsgroupe* <sup>(16)(17)</sup> である。たとえば当該地域外の需要に應ずる鉄鋼企業とそれに従事する労働者人口はそれである (115) pp. 319, 320 参照)。

このような、経済発展の現実的な傾向にもとづいて、*chorologisch* なるものは *chorographisch* な科学を築くときに、われわれは社会科学としての地域把握の学を築くことができよう。

トルコ共和国のばあいについてみると、東部にはなお自然経済に立脚する土侯的大地主がいて単一の国内市場も形成されていなかった二〇年代の状態から出発しながら、二九年世界恐慌を契機に、エタチスムの創設に向けて進むその過程でトルコの国民経済が形成されてゆく (19) 4ページ参照)。それに照応しながらトルコ共和国という経済地域も形成されてゆくのである。列強の半植民地状態に陥っていた末期オスマン帝国の状態から離脱して民族国家を形成し、民族工業を進展させなければならぬ状況からの要請、列強との対抗がもたらすソ連との接近の不可避性 (トルコの経済建設にたいするソ連の直接、

間接の援助、国家経済計画体制の模倣への傾斜)、世界経済恐慌の下での外国資本の弱体化と民族ブルジョアジーの相対的強化、およびそのような要因のもとで、シュメル銀行 (ついでエティ銀行も) と呼ばれる国有の特殊な銀行が国営工業企業の経営を通じて、エタチスム政策実施の中核的な役割を演ずる。地域形成の主導権はシュメル銀行を中心とするエタチスム諸機関の手中にある。この諸機関は、民族ブルジョアジーの要求を直接に反映しており「全資本家階級の利益のため、資本主義的企業家の機能をひきうけ (17) 173) ていた国家の手中にあった (以上の記述については (9) 4ページ以下参照)。

付言すれば、このような経済地域形成運動を軸にしてトルコ共和国の社会・経済的な地域的諸相が時系列として形成され、小論の冒頭に示した「文盲率」の分布像もそのなかでその姿を定めてきたのである。

(1) (13) IX、X章、(14) 2 (pp. 21~68) 参照。とくに経済地域については (16) 参照。

(2) 農業では自然条件の制約性 *Bedingtheit* が大きいので、自然地理的な区分から出発することが合理的であるに相違ないと思ってしまう点が第一の面、ついで伝統的な地誌あるいは地理学の方法にとつては、自然地理的な区分

つまり自然地理的な指標複合から出発することが正統であり、その好個の対象分野として農業が選ばれることになりやすいという点が第二の面、これら両面を同時に満足させようとすることから、ルートシュヴェイトが指摘するような結果が生じてくる。

(3) トルコの地域区分についてはダルト(Darlot, B. 教授が論じているが、県当局が統計刊行のさいに農業地域を使用することを批判的に述べたあとで、それが地理区に採用できない主要な理由を、行政境界がしばしば変更されることに求めており、地理区の設定のためにはより小さな行政地区の人口にもとづいた分析を経なければならぬとしている。そこでは、自然科学的な地域区分の原則と社会科学的な地域区分の原則との間に生じる葛藤や、したがってまた生産関係視標の意義などは論ぜられずにいる(4)。

ルートシュヴェイトが指摘する農業の技術的専門化をめざす地域区分の方向をよく示しているのは(5)である。エリンチ Erling, S. 教授は農業技術の近代化(機械化、灌漑設備の進展等)、耕地の拡大、主要作物の生産量の増大等については触れているが、トルコ農業でもことのほか重要な、農業上の生産関係にもとづく農業発展の制約(経営の零細性、さまざまな物納小作制度に典型的にあらわれている土地制度の前近代性、市場の狭小性、不安定性に由来する制約)については触れていない。エリンチ教授が精力的に展開してきた農学的農業地理学の研究は学界に寄与す

るところ大であるけれども、ここに指摘した欠落にたいしての自覚なしには、農業の発展にたいする評価は、体制順応的に一面的なものとなってしまうであろう。さらにいえば、生産関係をめぐる問題そのものこそ地域的特徴をめぐって真に究明するに値する問題の核をなすものなのである(この点については(8)参照)。換言すれば、地域設定の指標複合の中核には生産力を示す諸指標と関係づけながら生産関係の諸指標を位させるべきであろう。

(4) 自然環境という言葉もほぼ同義語であり、同様に使用される。自然条件よりも少し漠然とした語感を有している。

(5) アナトリアにおける農耕の急激なトラクター化については(6)(S. 64以下)を参照のこと。またトラクターによる小農民の「追放」については(8)(63, 64ページ)を参照のこと。

(6) 社会的行為のなかでは社会的生産が、社会の在りかたそのものの究極的な基底をなす意味で中軸に位するとするならば、社会的生産が自然と直接に関係をもつ局面、すなわち労働過程をめぐって発現する自然条件こそ、社会的行為にとつての自然条件のなかで、一般的には、最も重要な意義をもつものとみなしてよいであろう。

(7) トラクターとカラサパンの差異は、使用労働力の質・量の差異、灌漑施設の存否の差異、化学肥料の使用不使用の差異、使用する種子の純雑の差異等と共存している。

(8) 社会の意のままになるものになるということの意味し

ない。自然条件の不断の供給源は社会にとって外生的な自然であり、自然条件は社会にとっては意のままになりがたい。この「意のままにはなりがたい」そのなりがたさは社会の在り方にまさに対応してゐる(〔20〕 crp. 9~45 参照)。

(9) 一八世紀中葉以降の近代地理学の歴史をみよ(〔13〕第二章、21~100 ページ)。

(10) とくに工業の面では Naturbedingtheit の局地性は失われる。したがって地理学は好んで農業地理学に向ひやすい傾向をもっていた。

(11) 「地理的景観 (paysage géographique) のひろがりの範囲」として地域を規定する ソーヌ sortie, M. を批判する ジョイヤール Juillard, E. 著、地域の設定にせよして景観への依拠から脱却できない(〔17〕 88~91 ページ参照)。

(12) 「この見解を極端にまでおしつめていくと、他の学問分野が対象としないような事物を探しとめるような傾向が生じ、地理学がもっとも意味の乏しい事物の考察に限定されてしまったり、景観の主観的把握で芸術家たちと競争するような立場へと進む傾向が生じてくるだろう」(〔13〕 267 ページ)としてゐるのはさながらヘットナー Hettner, A. — 地理学の独自の存在権を熱心に探求した地理学者——への讃歌の趣のある「地理学方法論」(〔13〕)の著者の言としてはとくに興味深い。すでにヘットナー自身は景観学を批判して、感覚的に認知される現象に地理学の対

象を限ることに疑問を提出しながら「美学的地理学としてならその立場は正しい」(〔12〕 S. 128) と皮肉をいっているのだが、ハーツホーンの景観地理学にたいする批判が期せずして地理学の「独自の存在権」(〔12〕 SS. 114, 115 参照)の過度の探求にたいする批判と結合しており、ヘットナーの道が景観地理学を真に克服する道ではないことを暗示する結果となつてゐるのである。

(13) なおこの点については川島哲郎教授の決定的な批判を参照のこと(〔21〕『経済地理学年報』3, 4 ページ)。

(14) 「その考えをつねに変えており、そして考えの変ることとすぐにそれを発表するように見える」(〔13〕 232 ページ) ハッサルゲ Passarge, S. ではあるが、かれが地政学 Geopolitik に近い見解を発表してゐるのはかなり本質的なことのように思われる。景観論の最も有力な代表者シュリューターも「少なくとも政治地理学に關し、この問題の解決として地政学を歓迎した」(ヘットナーの評価〔13〕 232 ページ)という。景観論は地域の内的連関性を視野から欠落させるところで成立し、地政学は空間の抽象的な属性、長さや形、を前面に押し出し、内容の多様性を後景に押しやることによって地域の内的連関性を視野から欠落させるところで成立する(〔12〕 S. 127 参照)。

ハッサルゲは工場労働者階級への機械文化の影響を考察して「最後の結果は削口な、如才のない、屢々精神的に優れた意志及肉体不具者の上流階級の大衆と無骨で粗野で無教育ではあるが、而も本能的な性質及意志の力の点では遙

かに優れた労働者の大衆との間の全く著しい対立である。此の対立は是非一つの妥協に引き込まれねばならぬ」

〔11〕 266 ページと述べ、さらに「今日に於ては二つの力は相互に対立して居る。それはボルシェヴィズムを先頭とする無神論的な、ユダヤ人の指導の下にあるユダヤ人的社会主義的世界観とカソリック教会（絶望に陥れる魂の真正の救助者）とである。……近づきつつある恐るべき崩壊の原因は機械文化そのものであり、而してその崩壊の後にはボルシェヴィキの血の支配が実に生ずるのであつて……」〔11〕 296、297 ページと云つて居る。

〔15〕 ヘットナーによれば、自然体としての土地と人間の住家としての土地とを二元論の克服のためにリヒトホッフ *H. Richtshofen, F.* は *chorologische Wissenschaft* という古代の表現をライプツヒの就任演説中で示した〔12〕 SS. 106, 107。

なお *chorologisch* という表現も *chorographisch* という表現もほとんどその意味は異ならぬ〔13〕 89 ページ参照）。ヘットナーによれば *chorologisch* ないしは地誌的な科学（それこそが地理学のあるべき姿であるとヘットナーはいうのであるが）の統一性は、景観像の統一性などから得られるのではなくて、さまざまの位階の土地部分それ自体に内在する本質にもとづいている。この本質は二つの関係にもとづいている。その二つの関係とは、一は併存する事象が空間的諸関係とともに所を異にするにつれて変ることである。地球上のどのような現象も他の土地に

たいする位置づけなしには理解できないということになる〔12〕 S. 129)。周知のようにハーツホーンはこの点に重点を置いて地理学の本質を示すことを試みた〔13〕 X, XI, XII 章参照)。もう一つの関係とは、一定の土地部分に統合された自然界とそのさまざまな現象における因果関係である〔12〕 SS. 129, 130)。

〔16〕 これに対応するのはそれぞれ *gebietsbedienende Faktoren* であり *gebietsbedienende Bevölkerungsgruppe* である。地元消費向けの製パン業のことがそれである〔15〕 p. 320 参照)。

〔17〕 ここではシュニット・レンナーに生産力視点の偏重が読みとられるかもしれないが、かれの思考の全体系については〔19〕 (p. 5~75) 参照。

### 三 地誌的事実について（あとがきに代えて）

地誌とは地域に関する叙述である。地誌では、範疇を異にする多くの現象が、同じ地表空間部分内にあるというだけの理由で、それら相互の間に成り立つ因果関係を求めることもなしに、同じ紙幅のなかに採録されやすい。このばあいには、近似的に成り立つだけではあるがいわば同一空間性（同一場所性）は地域記載の堅固な立脚点となり得るであろうか。歴史叙述のばあいには、同時性を



有する諸現象が羅列的に記載されてあるならば、ひとはそこに歴史叙述としての価値を認めることはできない。地誌のばあいでも、同一空間性にたいする原始的、感覚的依存から完全に脱却しないかぎり、科学的な地域叙述に向うことはできないであろう。

同一地表空間部分内に無限に存在する事象のなかから、地域の叙述の遂行者が自己の価値判断に従って意義あるものと認める有限の事象を選択し、論理に適った、十分に客観的な構築を与えながら地域を構成し地域の特性を表現するときに、歴史についてカーのいう「歴史的事実」〔22〕6ページ以下〕に対応する地誌的事実が定着する。その地誌的事実とは、たとえば「ソ連領アルメニヤ共和国における多数のアルメニア人の存在と、それに隣接するトルコ領のかつての古代アルメニアの範囲におけるアルメニア人のほぼ完全な非存在」〔3〕*стр.* 360 (参照)との対比」といった、社会的に一般化への契機を十分に有するものでなくてはならない〔22〕89ページ以下参照〕。社会的に十分に意味をもつと判断される諸事象の、場所を介しての相互関係、またそれら相互関係をとり結んでいる事象群間の場所を介しての相互関係、つまりは

それぞれの位階での諸事象の場所を介しての相互関係を媒介にして地域は構成され（同時に「発見」され）記述される。

#### 文献

- (1) 23 *Ekin* 1960, *Genel Nüfus Sayımı, Türkiye Nüfusü*, Yayın No. 452, Ankara.
- (2) Price, M. P.: *A History of Turkey, From Empire to Republic*, London & New York, 1961.
- (3) Д у д ш у в е н т, Е. Ф.: Турция, Экономико-географический очерк, Москва, 1955.
- (4) Darkot, B.: "Türkiye'nin Coğrafi Bölgeleeri Nakkinda (Sur les régions géographiques de la Turquie)", *Türk Coğrafya Dergisi (Revue de Géographie Turque)*, Sayı (No.): 13—14, İstanbul, 1955, s. 141—149.
- (5) Ering, S.: "Türkiye'de Son Ziraî Gelismeler Nakkinda (On the Recent Agricultural Developments in Turkey)", *Türk Coğrafya Dergisi (Revue de Géographie Turque)*, Sayı (No.): 15—16, İstanbul, 1956, s. 47—63.
- (6) Louis, H.: "Die junge kulturgeographische Entwicklung der Türkei", *Deutscher Geographentag Hamburg*, 1 bis 5, August 1955, SS. 59—72.
- (7) Розалиев, Ю. Н.: Государственный Капитализм в Турции, «Государственный Капитализм в Странам

- Восток, под редакцией Девковский, А. И.», Москва, 1960. (アジア経済研究所、アジア・アフリカ研究所による邦訳プリントがそれぞれある)。
- (8) 鴨澤巖「トルコの経済地理における二、三の特徴」『法政大学文学部紀要』第四号、一九五八年、三九—九九ページ。
- (9) 鴨澤巖「アノロの国家資本主義」『アジア・アフリカ研究』一九六六年一〇月号、三—二六ページ。
- (10) Arfa, H.: *The Kurds, An Historical and Political Study*, Oxford U. P., London, 1966.
- (11) Passarge, G., 佐藤弘「国松久弥共抄訳「景観と文化の発達」古今書院、一九三三年。
- (12) Hettner, A.: *Die Geographie, ihre Geschichte, ihr Wesen und ihre Methoden*, Breslau, 1927.
- (13) Hartshorne, R., 野村正七訳『地理学方法論』朝倉書店、一九五七年。
- (14) *American Geography, Inventory & Prospect*, Syracuse, 1954.
- (15) Schmidt-Renner, G.: "Zur Regionalen Ökonomie", *Geographical Studies No. 27, Problems of Economic Region*, Polish Academy of Sciences, Institute of Geography, Warszawa, 1961, pp. 317—330.
- (16) Leszczycki, S.: "Aims of Economic Regionalization", *Geographia Polonica* 8, 1964, pp. 11—26.
- (17) 石原照敏「フランス学派における〈地域〉について」『香川大学経済論叢』第三九卷、第五・六号、八〇—一〇一ページ。
- (18) Семеновский, В. И., 古賀正則訳「経済地理学の対象と方法」『経済地理学の諸問題1』経済地理学会関西支部、一九六四年、二七—三七ページ。
- (19) Schmidt-Renner, G.: *Elementare Theorie der Ökonomischen Geographie, nebst Aufriss der Historischen Ökonomischen Geographie*, Berlin, 1961.
- (20) Воксакин, А. М.: *О Роли Географической Среды в Развитии Общества*, Ереван, 1956.
- (21) 川島哲郎「経済地域について——経済地理学の方法論的反省との関連において——」『経済学雑誌』第三二巻、第三号、第四号(『経済地理学年報』第二巻、一九五五年、一一—一七ページ)。

日本の社会科学の地理学の創設のために絶えず問題を提出し、つねに私たち後進を鞭撻してこられた石田龍次郎先生の退官を期として、先生のこれまでの御活動を記念するその声のひとつとなるにはあまりにも拙な論文であることを恥じながらも、小文を先生に献げることをお許し頂ければと願っています。

一九六七年三月二十九日

(法政大学教授)